

大学生の規範意識、道徳的認知、行動基準の関連

藤澤 文 (子ども心理学科・講師)

The Relationships among Social Norms, Moral Cognition, and the Standard for Public Scale in University Students

Aya Fujisawa

Abstract

Recently, there has been a decrease in social norms in adolescents; this has led to several problems. Social norms are important research topic in the field of education, psychology, and business management, among others. This study was conducted to clarify the factors that predict social norms by focusing on moral cognition-Kohlberg- and the Standard for Public Space Scale (Egocentric, Peer-standards, Regional-standards, Care about Others, and Public Values). Regression analysis was performed to analyze the impacts of moral cognition and the five behavioral standards. The results revealed that "Regional-standards" and "Care about Others" significantly predicted social norms and that moral cognition did not predict social norms in adolescents. These results were discussed.

Key words : social norms, moral cognition, the standard for public space scale, adolescents in teacher trained course

キーワード：規範意識、道徳的認知、行動基準、教員養成課程の青年

問題と目的

近年、若者の規範意識¹が問題として取り上げられることが少なくはない(例：平成24年版子ども・若者白書)。規範意識は高すぎる場合には道徳と慣習が分化していないと否定的に捉えられたり²、あるいは、低い場合には本人自身に害(例：未成年の飲酒・喫煙)をもたらす行為につながったりすると考えられることもある。そこで、若者の規範意識の様相について実証的に明らかにすることは社会的にも教育的にも意義がある³と考えられる。また、本研究で調査対象とする若者は教

員養成課程に在籍する大学生⁴であり、本研究の結果は数少ない教員養成課程の大学生の道徳性心理学領域における知見を積み重ねるという点においても意義があると考えられる。

規範意識に関する先行研究においては、小学生から大学生にかけて加齢に伴い規範意識が低下をすること(高橋, 2003; 廣岡・横矢, 2006)、そして、規範意識の変化量は時代における10年(経時効果：過去の2時点における規範意識の変化量。特に規範意識の低下を示す。)よりも加齢に伴う10年(発達的变化)において大きいことが実証

的に示されている（高橋，2003）。また、高校生よりも成人において規範意識が高いこと（友枝・鈴木，2003）が明らかにされている。これらの結果は青年期の規範意識が発達的に一時的に低くなる非線形発達をすると理論的に述べている内藤（1987）や山岸（2002）とも一致する。Kohlberg理論によると、道徳的認知（道徳性）や規範意識は加齢に伴い発達段階が上昇すると考えられているが、青年期には相対主義の存在が指摘される（Kohlberg，1985）。相対主義とは異なる道徳的原則が存在しそれらの間で衝突が生じたとき、どちらがより正しいかを定める理に適った方法はないと考える立場であり、結果として道徳的認知（道徳性）が低下したわけではないが、表出される道徳的認知（道徳性）が低い発達段階になるという特徴を示す。

以上の先行研究より、青年期の規範意識は理論的にも実証的にも発達的に一時的に低下していることが示唆される。よって、青年期の規範意識には経時効果の影響がないとはいえないものの、道徳的認知（道徳性）や規範意識の発達段階などの心理的要因が規範意識に大きく関係している可能性が示唆される。

道徳性心理学領域における規範や道徳性に関する先行研究では、Kohlberg理論において、自分本位にふるまう段階（前慣習的水準）、決まりに従う段階（慣習的水準）、道徳と慣習が分化する段階（脱慣習的水準）と発達的に変化すると考えられている。よって、道徳的認知（道徳性）は規範意識と相関しない傾向にあるのではないかと考えられる。

規範意識と道徳的認知（道徳性）およびほかの心理的要因との関連を検討した半田（2000）は、中学生を対象として規範意識が道徳的不活性化、反社会的行動および攻撃性と負の相関のあること、道徳的認知（道徳性）とは無相関であることを示している。また、規範意識を直接的に取り上げてはいないものの、これまでの研究においては、道徳性が自我発達と関係のあること（Connelly, Lilienfeld, & Schmeelk, 2006）、自己報告された

非行とは無相関であること（Tarry&Emler, 2007）が明らかとされている。それでは、大学生においても、規範意識は道徳的認知（道徳性）とは関係しないのであろうか。規範意識はどのような心理的要因によって予測されるのであろうか。

この問題に関して、大学生を対象として5つの行動基準（自分本位、中間的セケン、地域的セケン、他者配慮、公共利益）と道徳的認知（道徳性）の関連について取り上げた研究がある（藤澤・薊・永房・菅原・佐々木，2006）。「行動基準」とは、社会的場面においてヒトが行動を取る際の基準のことであり、5つの行動基準とは、他者の目を気にせず、自分の自由や利益を大切とすることを行動基準とする「自分本位」、身近な人間関係・仲間関係と歩調を合わせることを行動基準とする「中間的セケン」、地域社会からの評価を重視する「地域的セケン」、無関係な他者に対しても配慮することを重視する「他者配慮」、社会全体の利益や公平さを重視する「公共利益」という下位尺度からなる（菅原・永房・佐々木・藤澤・薊，2006）。藤澤ほか（2006）によると、道徳的認知（道徳性）が「他者配慮」、「公共利益」というより広い社会を考慮する行動基準と正の相関のあること、自分のことしか考えない「自分本位」、身近な社会のみ考慮する「中間的セケン」、「地域的セケン」といった行動基準とは無相関であることが示されている。また、「自分本位」という行動基準が社会的迷惑行為を促進し、「他者配慮」という行動基準が社会的迷惑行為を抑制することが示されている（菅原ほか，2006）。以上より、5つの行動基準が各々の特性から異なって規範意識を予測すると考えられる。具体的には、身近な社会を考慮する行動基準（自分本位、中間的セケン）、より広い社会を考慮する行動基準（地域的セケン、他者配慮、公共利益）、道徳的認知（道徳性）は異なって規範意識と関係することが予測される。

道徳に関する教員養成課程の学生を対象とした先行研究に関して、まずは、その知見が少ないことが挙げられる。Cummings, Harlow, & Maddux（2007）は道徳の観点から教員と教員になる以前の大学生を対象とした先行研究を概観した結果、

後者に関しては2件のみであり、教職を目指す大学生の研究が不足していることを示している。また、日本においても教職を志望する大学生の道徳に関する研究や教育が期待されていることが示されている(永田・藤澤, 2012)ものの、実証的証拠はほとんどない(例えば, 藤澤・永田, 2011)。その一方で、Colby (2008) は道徳的認知(道徳性)に関して人は18歳までに劇的な発達的变化を遂げるが、それ以降も数多くの発達課題が残されるため高等教育における道徳教育の重要性があると述べている。よって、道徳性の発達時期として重要だと考えられる青年期であり、なおかつ知見の少ない教員養成課程の大学生の道徳に関する知見を積み上げていくという点においても本研究は意義があると考えられる。

以上より、本研究では、教職課程に在籍する大学生を対象として、道徳的認知(道徳性)、5つの行動基準を取り上げ、規範意識とどのように関連するのかについて明らかにすることを目的とする。

仮説

仮説1: 道徳的認知(道徳性)は規範意識を予測しない。

仮説2: 社会を考慮する行動基準と身近な社会を考慮する行動基準では異なって規範意識を予測する。

方法

調査協力者

関東の私立大学の教職課程2クラスに在籍する大学2年生229名であった(男性=178名, 女性=51名, $M=19.1$, $SD=0.4$)。

調査手続き

授業中に質問紙調査が3回(①行動基準尺度、②道徳的認知(道徳性)、③規範意識)にわたり⁵、承諾者のみに集団実施された。承諾者には個人情報を守られること、得られたデータは全体として扱われるため個人が特定されないことが説明された。また、希望者には全体の結果をフィードバックする旨が伝えられた。

調査内容

①**行動基準尺度**: 菅原ほか(2006)による公共場面における行動基準尺度(20項目)を実施した。「自分本位」、「中間的セケン」、「地域的セケン」、「他者配慮」、「公共利益」という5つの下位尺度(合計20項目)からなる。回答は、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の5件法で求められた。

②**道徳的認知(道徳性)**: 日本の青年のために作成された道徳性の認知的側面を測定する日本版DIT(山岸, 1995)の縮小版が使用された。道徳的葛藤を含む3つのストーリーについて、発達段階の異なる考え方に対し選択式で回答するものである。3つのストーリーのうち1つをTable 1に示した。いずれのストーリーにおいても重要度(総計35項目, 5件法)と順位評定(総計12項目)が求められた。重要度は「全く重要ではない」から「非常に重要」の5件法で求められた。順位評定は「1番重要」から「4番目に重要」の4項目が求められた。

Table 1: モラルジレンマ課題(ハイイツのジレンマ)

Aさんの奥さんががんで死にかかっています。お医者さんは、「ある薬を飲めば助かるかもしれないが、それ以外に助かる方法はない。」と言いました。その薬は、最近ある薬屋さんが発見したもので、10万円かけて作って、100万円で売っています。Aさんは、できる限りのお金を借りてまわったのですが、50万円しか集まりませんでした。Aさんは薬屋さんにわけを話し、薬を安く売るか、または不足分は後で払うから50万円で売ってくれるように頼みました。でも薬屋さんは、「私はその薬を発見しました。私はそれを売って、お金をもうけようと思っているのです」と言って、頼みを聞きませんでした。Aさんはとても困って、その夜、奥さんを助けるために、薬屋さんの倉庫に入り、薬を盗みました。

【問】 Aさんは薬を盗んだ方がいいでしょうか、それとも盗まない方がいいでしょうか?

注) 永野(1985)より引用。

③**規範意識**: 藤澤(2005, 2013)で使用されている8項目(「人の物を盗む」、「ゴミのポイ捨て」、「嘘をつく」、「悪口を言う」、「公共の場で騒がし

くする」,「授業中の飲食」,「公共の場でメイクをする」,「未成年の飲酒」から作成された。「全く悪くない」から「非常に悪い」の6件法で回答が求められた。

得点化

行動基準尺度：各項目について、「全く当てはまらない」に1点、「あまり当てはまらない」に2点、「どちらともいえない」に3点、「当てはまる」に4点、「非常に当てはまる」に5点が割り当てられた。

道徳的認知（道徳性）：重要度は「全く重要ではない」に1点、「あまり重要でない」に2点、「いくらか重要」に3点、「かなり重要」に4点、「非常に重要」に5点が割り当てられた。順位評定は「1番重要」、「2番目に重要」、「3番目に重要」、「4番目に重要」の順に順位が割り当てられた。得られた得点はDITマニュアルに従いTotal Dと呼ばれる合成変数が算出され、分析に使用された。Total D（値の範囲：200～500）⁶の結果はFigure 1に示した。Total Dのスコアに関して、「200～250」が0名（0%）、「251～300」が2名（1.1%）、「301～350」が24名（13.7%）、「351～400」が85名（48.6%）、「401～450」が56名（32.6%）、「451～500」が7名（4.0%）であった。

規範意識：8項目について、「全く悪くない」に1点、「悪くない」に2点、「どちらかという悪くない」に3点、「どちらかという悪い」に4点、「悪い」に5点、「非常に悪い」に6点が割り当てられた。8項目の総計が規範意識得点として使用された。

コード化

道徳的認知（道徳性）の発達段階別の人数をFigure 2に示した。2段階が10名（5.7%）、3段階が26名（14.9%）、4段階が68名（38.9%）、5段階が60名（34.3%）、相対主義（4½段階）が1名（0.6%）、2段階以上の段階が混合した人が10名（5.71%）であった。

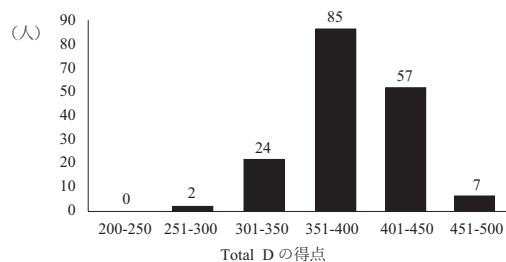


Figure 1 : Total Dの分布(N=175)

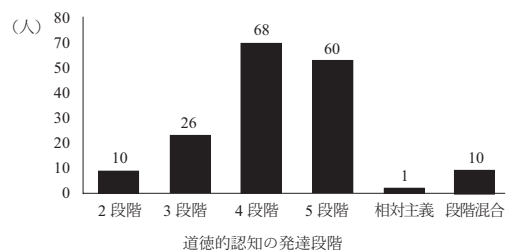


Figure 2 : 道徳的認知の発達段階別の人数 (N=175)

結果

基本統計量

「行動基準」の下位尺度（自分本位，中間的セケン，地域的セケン，他者配慮，公共利益）別の人数、平均値、SD、 α 係数、および「道徳的認知（道徳性）」、「規範意識」の人数、平均値、SDをTable 2に示した⁷。

行動基準、道徳的認知は規範意識を予測するのか

分析に先立ち、「行動基準尺度」、「道徳的認知（道徳性）」、「規範意識」の尺度間相関をTable 3に示した。尺度間相関をみると、「自分本位」は「他者配慮」、「公共利益」、「道徳的認知（道徳性）」、「規範意識」と負の相関があった。「中間的セケン」は「地域的セケン」と正の相関があった。「地域的セケン」は「中間的セケン」、「他者配慮」、「規範意識」と正の相関があった。「他者配慮」は「自分本位」と負の相関、「地域的セケン」、「公共利益」、「規範意識」と正の相関があった。「公共利益」は「自分本位」と負の相関、「他者配慮」、「道徳的認知（道徳性）」、「規範意識」と正の相関があった。「道徳的認知（道徳性）」は「自分本位」と負の相関、「公共利益」、「規範意識」と正の相関があった。「規範意識」は「自分本位」と負の相関、「地域的セケン」、「他者配慮」、「公共利益」、

「道徳的認知（道徳性）」と正の相関があった。

続いて、「規範意識」が「道徳的認知（道徳性）」、「行動基準」によりどの程度予測されるかを検討するために、「規範意識」を従属変数、「自分本位」、「仲間のセケン」、「地域的セケン」、「他者配慮」、「公共利益」、「道徳的認知（道徳性）」を独立変数として、強制投入法を用いて重回帰分析を行った。分析に先立ち、投入する独立変数の相関を検討した。その結果、多重共線性の問題はないと考え、全ての変数を分析に用いた。重回帰分析の結果、「地域的セケン」、「他者配慮」が基準を満たして選択された ($R^2=0.19$ ($F(6, 125) = 4.94, p < .001$)。得られた標準化回帰係数の値は Table 4 に

示した。

以上の結果より、「地域的セケン」、「他者配慮」が「規範意識」を予測すること、「自分本位」、「仲間のセケン」、「道徳的認知（道徳性）」は「規範意識」を予測しないことが示された。以上より、仮説 1、仮説 2 は支持された。

考察

本研究では、教員養成課程に在籍する大学生を対象として、どのような心理的要因が規範意識を予測するのかについて検討された。具体的には、「規範意識」、「道徳的認知（道徳性）」、5つの行動基準（自分本位、仲間のセケン、地域的セケン、

Table 2 行動基準尺度, 道徳的認知 (道徳的認知), 規範意識の人数, 平均値, 標準偏差 および行動基準の下位尺度の α 係数

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
①自分本位	211	8.4	3.6	0.74
②仲間のセケン	209	8.5	3.4	0.74
③地域的セケン	211	12.7	3.9	0.75
④他者配慮	210	14.7	3.3	0.80
⑤公共利益	212	15.6	2.6	0.51
⑥道徳的認知	175	388.2	34.2	
⑦規範意識	182	35.7	5.7	

Table 3 : 行動基準尺度, 道徳的認知 (道徳的認知), 規範意識に関するピアソンの積率相関係数

	仲間のセケン	地域的セケン	他者配慮	公共利益	道徳的認知	規範意識
自分本位	.11	-.05	-.26 ***	-.41 ***	-.16 *	-.32 ***
仲間のセケン		.30 ***	-.03	-.09	.10	-.06
地域的セケン			.21 **	.06	.10	.32 ***
他者配慮				.46 ***	.05	.35 ***
公共利益					.15 †	.33 ***
道徳的認知						.18 *

$p < .10^\dagger, p < .05^*, p < .01^{**}, p < .001^{***}$

Table 4 : 規範意識と道徳的認知, 行動基準との関連

	非標準化回帰係数	標準誤差	標準化回帰係数(β)	<i>t</i> 値	有意差
道徳的認知	.02	.01	.12	1.42	<i>ns</i>
自分本位	-.25	.15	-.15	-1.62	<i>ns</i>
仲間のセケン	-.21	.15	-.12	-1.39	<i>ns</i>
地域的セケン	.35	.12	.25	2.84	**
他者配慮	.30	.18	.16	1.66	†
公共利益	.11	.25	.04	0.43	<i>ns</i>

$p < .10^\dagger, p < .01^{**}$

他者配慮、公共利益)の関連が検討された。その結果、「自分本位」は「規範意識」と負の相関があること、「地域的セケン」、「他者配慮」、「公共利益」、「道徳的認知(道徳性)」は「規範意識」と正の相関があることが明らかとされた。「規範意識」を独立変数、その他の変数を従属変数とした重回帰分析を行った結果、「地域的セケン」、「他者配慮」が「規範意識」を予測していた。以下では、これらの結果について考察を行う。

本研究の結果より、「自分本位」は「規範意識」と負の相関があった。「自分本位」は身近な社会を考慮する行動基準であるため、「規範意識」の低さと関連したと考えられる。その一方、「地域的セケン」、「他者配慮」、「公共利益」は「規範意識」と正の相関があった。これらの行動基準は「自分本位」、「中間的セケン」と比較してより広い社会を考慮する行動基準であり、「規範意識」と正の相関を示したと考えられる。また、「道徳的認知(道徳性)」は「規範意識」と正の相関があり、中学生を対象として「道徳的認知(道徳性)」と「規範意識」が無相関であることを示した半田(2000)とは異なる結果が示された。このような結果が得られた理由として、半田(2000)の調査対象が中学生であるのに対し、本研究の調査対象が大学生であり、調査対象の発達段階が異なることが可能性の一つとして考えられる。

5つの行動基準(自分本位、中間的セケン、地域的セケン、他者配慮、公共利益)や「道徳的認知(道徳性)」が「規範意識」を予測しているのかを明らかにするために、強制投入法を用いた重回帰分析を行った結果、「地域的セケン」、「他者配慮」が「規範意識」を予測していた。以上より、周りの人(近所や地域の人(地域的セケン)、電車や映画館の中(他者配慮))を気かけたり、評価を気にしたりする行動基準が規範を支持していることが示唆される。言い換えると、心理的距離が近い周りの人(地域的セケン)だけではなく心理的距離は遠い(無関係な他者)けれども物理的距離が近い周りの人(他者配慮)に対して気かけたり、周りの人の評価を気にしたりという行動基準を持っている人が規範を支持しているとい

える。その一方、重回帰分析の結果、「地域的セケン」および「他者配慮」が「規範意識」を予測し、「道徳的認知(道徳性)」が「規範意識」を予測していないことが明らかとされた。道徳と慣習の両方に対して守らなくてはならないことだと認識する発達段階(規範意識が高い)に相当する「地域的セケン」や「他者配慮」が「規範意識」を予測し、なおかつ発達に伴い道徳と慣習が分化すると考えられる「道徳的認知(道徳性)」(規範意識が必ずしも高くない)が「規範意識」を予測していなかったことは、「道徳的認知(道徳性)」が「規範意識」を予測しないという理論的見解を支持するものと考えられる。

以上の結果より、規範意識の低い人にとっては心理的距離、物理的距離に関わらず周りの人や地域の人を配慮するような物の見方や考え方をする機会を持つことが規範の理解につながるのではないかということが示唆される。

最後に、本研究の調査協力者は教員養成課程に在籍する大学生であり、教員養成課程に在籍する大学生の規範意識、道徳的認知(道徳性)、5つの行動基準およびそれらの関係性について部分的にも明らかとしたと考えられる。第一に、教職課程の青年の規範意識、道徳的認知(道徳性)および5つの行動基準の実証的証拠を示した。第二に、規範意識が「地域的セケン」、「他者配慮」により予測されることを明らかとしたことから、周りの人のことを考えたり、他者を思いやったりすることが規範意識と関係することが示唆された。このことは、教員養成において他者の立場を考えたり、推測したりして行動するという、一見、規範意識とは直接的に関係しないこれらのことを行ったり、トレーニングしたりすることにより、他者のことを思いやることができるだけでなく、低くはない規範意識を併せ持つ大学生を教員養成課程において育成することにつながる可能性を示唆する。しかしながら、大学生を対象とした規範意識に関係するほかの要因の有無や、規範意識と具体的な道徳的行動・向社会的行動の関係性など検討されるべき課題はいくつか残されている。また、教員養成課程の大学生とそれ以外の大学生を比較し、

発達上の特徴やその介入方法についても検討していく必要があると考えられる。よって、今後はこれらについて検討の余地が残されるといえる。

脚注

1 規範意識とは、「ある対象について価値判断を下す際、その前提となっている価値を価値として認める意識（大辞泉）」とある。本研究では、Turiel（1998）に従い、道徳（普遍的価値のある事柄）および慣習（社会的文脈に依拠する事柄）に相当する事柄を規範と定義する。同時に、「規範意識が高い・低い」とは、ある事柄の価値判断を行う際にその価値を価値として認める程度の高低と定義する。また、道徳性とは、「人格・判断・行為などが道徳的であること（大辞泉）」とあり、本研究では Kohlberg の道徳性発達段階に基づき開発された日本版 DIT（山岸，1995）を用いて測定される事柄を道徳性と定義する。以上より、規範を支持するという考え方は道徳性が発達していく途中までは道徳性の一部として含まれるが、道徳性の発達に伴い道徳（普遍的価値のある事柄）と慣習（社会的文脈に依拠する事柄）が分化するという立場に立つ。

2 Kohlberg（1985）によると、道徳性は前慣習的水準、慣習的水準、脱慣習的水準（3水準6段階）の順序で発達する。慣習的水準は道徳と慣習が未分化な状態であり、道徳と慣習が分化するにいたった状態が脱慣習的水準と定義される。従って、本研究の定義では規範には道徳、慣習に関する事柄が含まれており、規範意識の高いことが必ずしも道徳性の高いことであるとはいえない（規則に従うことを正しいと判断する慣習的水準は道徳性が高いとは評定されない）。

3 青少年、青年の規範意識の変動に関しては安倍政権において政策上取り上げられるべき課題として挙げられている。これを受けて、2007年に国立国会図書館調査及び立法考査局において「青少年をめぐる諸問題プロジェクト」が発足している。その中では、小学生から大学生を対象とした規範意識、道徳等に関する調査が実施されている（例えば、藤澤，2009）。また、国立大学法人東京学芸大学において「地域・学校と連携した総合的道徳教育プログラム」が政府の助成を受けて2009年に発足している。研究対象は幼稚園から大学生および全国から抽出した現職教員（小・中学校）、全国

の教員養成課程を持つ教員養成大学教員、全国から抽出した成人と包括的である（永田・藤澤，2010a; 永田・藤澤，2010b; 松尾・永田・藤澤，2012; 永田・藤澤，2012）。以上にみられる政策の流れより、規範意識や道徳について考えていくことが社会から期待されていることが示唆される。

4 現職の小・中学校教師を対象とした調査（永田・藤澤，2012）によると、教員養成大学および教師を志望する学生への期待として、教師を志望する学生の道徳や規範意識が挙げられていることから、本研究では教員養成課程に在籍する学生を調査対象としている。

5 質問への時間がかかり、調査協力者への負担が懸念されたため、調査は3回に分けて実施され、1人が3回にわたり回答した。また、調査が3回の授業に渡ったことにより、公式クラブ活動、介護等実習、教育実習のために調査の一部を不参加となった調査協力者がいる。

6 道徳的認知（道徳性）の指標として、先行研究（半田，2000）に従い、ステージではなく Total D が用いられた。ステージとは DIT を使用して測定することのできる道徳的認知発達段階のことであり、2段階、3段階、4段階、4½段階、5段階があり、非線形である。一方、Total D は道徳的認知の発達を線形であらわすことが可能であり、本研究で予定した統計分析を行うことが可能になる。

7 各項目の回答者にバラツキがあるのは、教育実習、介護等実習、公式クラブ活動の為に授業を休んだ協力者がいるためである。

引用文献

- Colby, A. (2008). Fostering the moral and civic development of college students. In L. Nucci, & D. Narvaez., (Eds). *Handbook of moral and character education* (pp.391-413). New York and London: Routledge.
- Connelly, B. S., Lilienfeld, S. O., & Schmeelk, K. M. (2006). Integrity Tests and Morality: Associations with ego development, moral reasoning, and psychopathic personality. *International Journal of Selection and Assessment*, 14, 82-86.
- Cummings, R., Harlow, S., & Maddux, C. D. (2007).

- Moral reasoning of in-service and pre-service teachers: a review of the research. *Journal of Moral Education*, 36, 67-78.
- 藤澤文. (2005). 大学生の社会的ルール決定場面における討論手続き パーソナリティ研究, 15, 17-29.
- 藤澤文・薊理津子・永房典之・菅原健介・佐々木淳. (2006). 公共場面での行動基準に関する研究(2)－大学生における行動基準尺度と道徳的認知の関連－日本心理学会第70回大会論文集, 148.
- 藤澤文. (2009). 規範意識はなぜ変容するのか？社会システムの変動と個体内における変容 国立国会図書館調査及び立法考査局総合調査報告書, 2008-4, 221-236.
- 藤澤文. (2013). 青年の規範の理解における討議の役割 京都：ナカニシヤ出版.
- 藤澤文・永田繁雄. (2011). 道徳教育における教育委員会を対象とした調査 東京学芸大学総合的道徳教育プログラム第2回フォーラム, pp.44-53.
- 半田元子. (2000). 青年期における道徳的認知と反社会的行動との関連－道徳不活性化メカニズムについての検討 お茶の水女子大学大学院修士論文 (未刊行)
- 藤岡秀一・横矢祥代. (2006). 小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析 三重大学教育学部研究紀要, 57, 111-120.
- Kohlberg, L. (1985). The just community approach to moral education in theory and practice. In M. W. Berkowitz, & F. Oser, (Eds.). *Moral education: theory and application* (pp.27-82). NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 松尾直博・永田繁雄・藤澤文. (2012). 成人の道徳的認知と子どもの頃の体験に関する調査報告書 東京：東京学芸大学.
- 内閣府編. (2012). 平成24年版 子ども・若者白書.
- 内藤俊史. (1987). 道徳的認知と相互行為の発達－コールバーグとハーバーマス－ 藤原保信・三島憲一・木前利秋(編著) ハーバーマスと現代 (pp.182-195). 東京：新評論.
- 永田繁雄・藤澤文. (2010a). 「全国の大学・短大における教職科目「道徳の指導法」に関する調査」結果報告書 東京：東京学芸大学.
- 永田繁雄・藤澤文. (2010b). 「道徳教育に関する教育委員会を対象とした調査」結果報告書 東京：東京学芸大学.
- 永田繁雄・藤澤文. (2012). 道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査－道徳の時間への取組を中心として－ 結果報告書 東京：東京学芸大学.
- 永野重史. (1985). 道徳性の発達と教育 コールバーグ理論の展開 東京：新曜社.
- 菅原健介・永房典之・佐々木淳・藤澤文・薊理津子. (2006). 青少年の迷惑行為と羞恥心－公共場面における5つの行動基準との関連性 聖心女子大学論叢, 107, 59-77.
- 高橋征仁. (2003). コールバーグ理論と道徳意識研究－規範意識における相対化と逸脱行動 社会学研究, 74, 27-58.
- Tarry, H., & Emler, N. (2007). Attitudes, values and moral reasoning as predictor of delinquency. *British Journal of Developmental Psychology*, 25, 169-183.
- Turiel, E. (1998). The development of morality. In N. Eisenberg (Ed.), W. Damon. (Series Ed.), *Handbook of child psychology. 5th ed. Vol.3.Social, emotional, and personality development.* (pp. 863-932). New York : Wiley.
- 友枝敏雄・鈴木護. (2003). 現代高校生の規範意識：規範の崩壊か、それとも変容か 福岡：九州大学出版会.
- 山岸明子. (1995). 道徳的認知の発達に関する実証的・理論的研究 東京：風間書房.
- 山岸明子. (2002). 現代青年の規範意識の希薄性の発達の意味 順天堂医療短期大学紀要, 13, 49-58.

要旨

本研究の目的は青年を対象として、規範意識、道徳的認知(道徳的認知)、5つの行動基準の関連を検討することであった。調査協力者は教職課程に在籍する大学生229名(男性178名,女性51名)であった。調査内容は、規範意識8項目、道徳的認知(DIT)、行動基準尺度(「自分本位」、「仲間のセケン」、「地域的セケン」、「他者配慮」、「公共利益」)であった。変数間の相関を算出した結果、「自分本位」は「規範意識」と負の相関があり、「地域的セケン」、「他者配慮」、「公共利益」、

「道徳的認知（道徳性）」は「規範意識」と正の相関があった。「規範意識」を従属変数、そのほかの変数を独立変数とした重回帰分析の結果、「地域的セケン」、「他者配慮」が「規範意識」を予測していた。以上の結果について議論した。

(2012年9月20日受稿)